

論文審査報告書（論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨）

シメイ 氏名(生年月日)	長谷川 智之 (1969年9月23日)
学位の種類	博士(経営管理)
学位記番号	戦博甲第11号
学位授与の日付	2020年3月21日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	「経営革新におけるプロ経営者の役割」
論文審査委員	主査 丹沢 安治 (中央大学大学院戦略経営研究科教授) 副査 榊原 清則 (中央大学大学院戦略経営研究科教授) 副査 田中 洋 (中央大学大学院戦略経営研究科教授) 副査 真野 俊樹 (中央大学大学院戦略経営研究科教授) 副査 池本 正純 (専修大学名誉教授)

論文内容の要旨

本研究においては、第1に内部昇格によらない、外部から招聘されるプロ経営者に係るテーマを扱うことから、経営実務家のための指針を提供する。ここでは、まず経営革新におけるプロ経営者の役割に関する新たな視角を示すために、日本ではまだ僅少であるプロ経営者を直接観察して、どのような背景で起用され、どのような役割を担っているのかを分析する。第2に、理論的視角を利用した研究であることから、研究者に向けた内容も追及する。ここでは、プロ経営者活用にかかわる事象を分析するために複数の理論を統合して複眼的レンズを形成し、実務的に意味のある提案を可能にしている。この目的を達成するため、組織の経済学と企業家論からプロ経営者の分析枠組みを示している。企業家活動という視点からプロ経営者を利益機会の発見という側面に光を当て、組織の経済学から、課題となる問題の発見・解決者として扱うことによって、経営革新におけるプロ経営者の役割を検討している。

次に、日本企業がプロ経営者を起用した事例から、一つには、プロ経営者がどのように異なった企業組織において異なる便益を生み出すのかを分析し、さらにもう一つには、プロ経営者が企業組織における異質性と生存を生じさせるという独自の役割を分析する。

本論文の構成

序章においては、本研究の目的と本研究において採用されている「定性的なデータから事象の背後にある構造を把握する方法」について明らかにするとともに、企業家論、組織の経済学、構造的空隙の理論をレビューしている。

第2章においては、「非連続な環境変化としがらみの不調和」がもたらす経営上の諸問題を分析し、解決策を提示するために、利益機会の発見と効率性の追求という二つの課題を持つプロ経営者の特性を明らかにしたうえで、理論的な先行研究を統合し、プロ経営者を分析するための複眼的レンズとして独自の理論的枠組みを提案している。

第3章においては、自ら開発した複眼的レンズを用いて、インタビューによって収集した1次資料を分析

し、「日本におけるプロ経営者発生のメカニズム」を見出している。日本企業を取り巻く環境変化とプロ経営者の資質からどのようにしてプロ経営者が発生してきたかを明らかにしている。

第4章においては、現在我が国において喫緊の課題と言われている中小企業の承継の問題に自らの複眼的レンズを適用し、やはりインタビューによる1次データを分析することにより、プロ経営者が中小企業の承継にかかわって果たせる貢献を明らかにしている。

第5章においては、それまでに二つの側面から光を当てることによって明らかになったプロ経営者という存在を特に内部昇格者、経営コンサルタントとの相違という面から、同じくインタビューによる1次データを分析したうえで、プロ経営者の資格、要件について明らかにしている。

第6章は、結論として、プロ経営者の特性を総合的にまとめ、独自の分析枠組みがもたらす学術上の貢献を示すとともに、実務上の貢献を整理している。

本論文に対する評価

現代の日本の産業・経済における喫緊の課題をテーマにし、時代を捉えた業績と言える。とくに、中小企業の承継問題を解決するのに、外部人材（プロ経営者）を積極的に活用するというのは、説得力を持つ方法であると思われる。

また、プロ経営者を分析するに際し、その理論的視角として、企業家論の視点を取り入れ、しかも、組織の経済学、とりわけ取引費用理論の応用と統合して、独自の分析視角を形成している点は新規性をもたらす優れた方法であり、新規性のある成果であると認めることができる。

もちろん、この論文は申請者にとって終着点ではない。「しがらみ」や「中小企業の承継」のみが、プロ経営者によって解決されるべき問題ではないし、また独自の分析視点も常に改善され、彫琢される必要があるものであることは言うまでもない、しかし、申請者が本論文によって、実務に従事しながら学術的な貢献も果たしうる能力を持つことを示し、研究者としての出発点に立ったことは認めることができる。

結論

以上の審査の結果、審査委員会は、全員一致で本論文について博士（経営管理）の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。

以上